

## 教育委員の県外訪問について

日程：平成29年1月30日から31日まで

- 視察先：① 私立中村中・高等学校  
② 筑波大学附属久里浜特別支援学校  
③ 横浜市立東山田中学校

報告者：島原 俊英

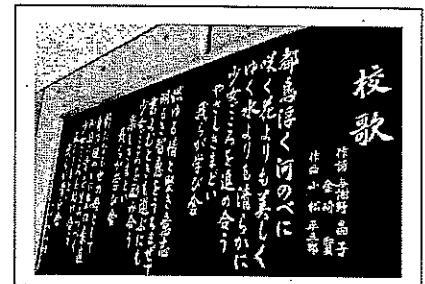
### 1) 私立中村中・高等学校 校長 永井哲明氏

致知という人間学を学ぶ月刊誌上で、「全員を一流に育てる」という理念と共に、紹介をされた記事を拝見し、訪問を楽しみにしていました。

1909年創立以来の考え方を大切に受け継ぎながら、世界を視野に学校の在り方を常に模索をしていると感じました。

その基本となる考え方は以下です。

- ① 機に応じて、活動できる生徒を育てる  
それぞれの持ち味を尊重する。興味関心を出し合う。  
6年間を通じたキャリアデザイン教育で  
コンピテンシー（総合的変化対応力）を育てる。
- ② 全員レギュラー補欠は一人もない。  
どんな生徒でも伸びたいと思っている。  
結果ではなく、プロセスを見る。  
喜びに差をつけない。頑張ってきたことを評価する。  
習熟度別に、下位の子にも手厚く指導をする。



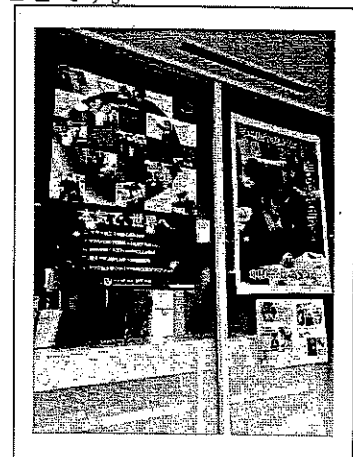
アクティブラーニングと共に、ディープラーニングも意識している。

知識なきところに思考はない。土台がしっかりしていることが大切。

7年前からディベート、ビブリオバトルに取り組んでいる。

同校の特徴は、特に6年間を通じたキャリア教育に力を入れていることです。

第11代校長の永井先生が、キャリアコンサルタントの資格を持っており、「自己肯定+他者肯定、職業観の育成、自主自立型学習」など、学年ごとの目標を意識しながら、一人一人が自分でキャリアデザインできるように、自ら指導を行っています。



2) 筑波大学附属久里浜特別支援学校 副校長 雷坂浩之氏  
国立特別支援教育総合研究所 主任研究員 横山貢一氏

知的障がいを伴う自閉症の幼児児童に対して、  
子供たちの個別課題に合わせて、教育を行うと共に、  
指導法の研究などを行っていました。

教室はととても広く、水場、トイレなどの施設も  
完備されていて、いい環境でした。

一人一人の障がいの状態、発達段階、特性など、  
本当に様々で、一人一人をしっかり見て、支援することは、  
大変な時間と労力のいることだと思います。

見学に訪れた私たちの存在にも感わされることなく、  
学習を続けているのは、社会への適応に向けた指導の表れではないかと感じました。

野菜などを育てたり、料理をしたり、買い物をするなどの体験型などの指導方法など、個別の  
課題学習、自立のための活動、社会生活に関する指導を実践し、検証をしていくことで、その知  
見が蓄積されると共に、全国の関連施設の先導的役割も果たしていると思われま

廊下の壁に金澤翔子さんの「共に生きる」という書が、掲げられていました。好きなことや得意な  
ことを見つけて、能力を伸ばしながら、自立を目指す同校の教育方針にふさわしい、素晴らしい書  
でした。



3) 横浜市立東山田中学校 学校運営協議会 代表 竹原和泉氏

東山田中学校は、平成17年度の開校と同時に、  
コミュニティスクールの指定を受けた学校です。

中学校内に“コミュニティハウス”というものがあって、  
地域の方々が自由に入出りできる環境があることが素晴らしい、  
とまず思いました。

P T A活動や学校評議員制度など、  
多くの学校で地域との連携を進めていますが、  
教育に関心のある一部の方々との交流に限られています。



地域の方々が気軽に学校を訪れ、先生方も自由に地域の方々の意見を聞くことができるなど、  
もっと、活発な協力関係を作るためには、どうすればいいのか? その答えがここにあると思  
いました。 コミュニティスクールに設置される“学校運営協議会”の役割に、「校長が作成する学

校運営の基本方針を承認する」というのがあります。そして、学校運営協議会は一定の権限と責任を持って学校運営に携わる、とされています。地域コミュニティの中心に学校を据える、素晴らしい取組であると感じました。

コミュニティハウスのコーディネーターが、様々な団体や外部講師やボランティア活動と繋いで、地域の中での学習の機会を創り出していました。

平成27年度（2015年） 東山田中学校区学校支援

項目	担当	内容	実施時期	実施回数	参加人数	備考
学校行事等	校長 大塚 誠	学校行事等				
学校運営協議会	大塚 誠	学校運営協議会				
本部事務	大塚 誠	本部事務				
ボランティア養成講座 (学級主催)	大塚 誠	ボランティア養成講座 (学級主催)				
大塚 誠	山田中					
	東山田小					
	東山田小					
	東山田小					
キャリア教育	1年					
	2年					
	3年					
キャリア・キャンプ	大塚 誠	キャリア・キャンプ				
ひまわりまつり	大塚 誠	ひまわりまつり				
カレッジ	大塚 誠	カレッジ				
ファンド	大塚 誠	ファンド				
山田野営	大塚 誠	山田野営				
遠征実習	大塚 誠	遠征実習				
研修	大塚 誠	研修				
その他	大塚 誠	その他				

★ 中村中学校・高等学校

全国高校バレーボール大会で幾度となく優勝し、名を馳せた有名私立女子校である。体育教師であった梅沢校長の後任の永井哲明校長がどのような学校経営をされているのか楽しみに訪問した。

江戸下町の風情を残す深川界隈の街の真ん中に位置する学校は、エレベーターで移動できる地上 7 階の建物を有する。7 階のサロン風の大きな図書館は、「空中図書館」として学校祭等の際には地域の方々へも一般開放されている。図書館からは、スカイツリーも眺望できた。

驚いたことは、管理職が変わり事前の予備知識とは対比した経営をされていたことである。経営方針の一つとして、生徒たちが、グローバル社会を生き抜くために必要な知識・技能の他に思考力・判断力・表現力・主体性・多様性・協同性ととらえその中の「思考力」を特化して、論理的思考力、相互理解の思考力、批判的思考力、協同的思考力、地球的思考力を各教科の年間指導計画に位置付けている。

また、校長は、キャリア・コンサルタント（国家資格）を取得され、キャリア教育の先導者的存在であるとともに、学校説明会では、自らもアクティブラーニング型授業（スペシャル授業）を実施されていた。

★ 筑波大学附属久里浜特別支援学校

昭和 48 年、国立久里浜養護学校として（幼稚部 6 学級、小学部 6 学級）開校。平成 16 年 4 月には、国立大学法人法附則の規定により、筑波大学附属久里浜養護学校となる。さらに、平成 19 年 4 月に国立大学法人法施行規則の一部改正により、現在の筑波大学附属久里浜特別支援学校となる。

神奈川県横須賀に位置するこの学校は、隣接する国立特殊教育総合研究所との相互協力のもと知的障がいや自閉症の子どもたちを対象に教育研究を行い、その成果を全国の特別支援学校等に提供するなど先進的な学校である。約 50 名の児童に 54 名の職員が指導に当たり、先生方も学校の研修とは別に個人研究や研究授業も毎年実施されている。約 15,000 m<sup>2</sup>の敷地内にある約 2,300 m<sup>2</sup>の校舎には、ランチルーム、のびのび広場、デモホーム（宿泊学習施設）、プレイルームなど施設がある。また、遠方から通学する子どものための寄宿舎も用意されている。

個に応じた指導では、「個別指導計画等に基づいたきめ細かな指導」、「筑波大学国立特別支援教育総合研究所等との連携による指導実践や研究活動の推進」、「教職員研修の実施」、「家庭や関係機関との連携協力」が挙げられる。

しかし、ここで素晴らしい教育を受けて次の中学校や中学部への引き継ぎ先が心配かつ不安に感じた。

★ 横浜市立東山田中学校コミュニティハウス

平成17年4月に神奈川県初のコミュニティスクールとして開校。横浜市北部の都筑区のニュータウンに位置する人口急増地域の学校で、生徒数867名（25学級）である。校内には、コミュニティハウスが併設され、行き来が自由である。

学校運営協議会は、コミュニティ・スクールと称し、学校の応援団・辛口友人として学識経験者や保護者・地域の方々から学校の経営方針や生徒会企画など様々な分野について、意見を頂いている（職員も年1回は必ず参加）。ここでは、東山田中学校区学校支援地域本部（やまたらう本部）が指定され、中学校区全体を対象に①コミュニティカレンダーの作成と配布②やまたらうねっと（HP）の運営③キャリア教育のコーディネート④ボランティアのコーディネート⑤やまたらうファンドの運営等がなされている。

代表の話によると、「今まで地域一体となって児童生徒に接してきたことは、教職員の意識改革にもなるし、学校の活性化にもなった。今後、合同授業研究の推進や児童生徒の交流事業を推進するとともに教職員の更なる意識の高揚と継続を図りたい。」とのことだった。

貴重な訪問をさせていただきありがとうございました。

## 1 筑波大学附属久里浜特別支援学校

知的障がいと自閉症を併せた児童の支援学校である。と同時に、特別支援学校の教育課程の改善、自立活動の指導法などの研究も行い、大学生、現職教員の研修の場としても大きな役割を担う。

現在 幼稚部（3.4.5歳）18人 小学部 52人 在籍 抽選により入学が決まる。

1学級6人に対し、3人の教諭がいるが、この中には各県からの人事交流（研修生として）で来られた教諭も入るため、実践的な研修となる。指導は、個別指導計画に基づき、きめ細かい指導、成果の評価と改善等が行われていた。

教員や学生の教育機関として、国内、海外より研修、実習、視察などを受け入れており、研究会などで特別支援教育に熱心に取り組んでいる。頻繁に視察等が行われるため、来訪者に対しては、子どもたちも幾分慣れているようで、実際、小学部の教室では、通常と同じように参観できた。今回幼稚部はインフルエンザの影響で見ることができなかった。

なぜ、中学部がないのか？保護者からの要望はある。副校長先生のお話では、最も障がい表面化するのが思春期。幼児期、児童期で早期発見し、その対応をしっかりとっておけば、中学生の時期では、その効果が表れるとしている。一方で課題もある。卒業後は8～9割の児童は居住地のある公立の特別支援学校、学級に進学する。現在は広い教室で有効的に空間を使えるが、公立学校ではそれは望めない。ハード面、ソフト面ともにこの久里浜の学校のような現状継続は難しいので、それを保護者、本人に理解できるよう少しずつ授業等の中で、学校側が指導していかなければならない。

これからの希望としては、医療機関との連携。子どもたちが医療機関を受診するときの専門医としての対応などの研修会を行いたいとのことであった。さらに、幼稚園教諭、保育士への研修会等も行い、通常の幼稚園、保育園、子ども園等に通う子どもたちを支援できるように資質向上も考えている。

保護者との連携については、療育に関しては、母親が主となることが多い。配偶者や親族の理解が進まない中でも、学校側から、親族に対して障がいへの理解や、養育への働きかけを積極的に行うことで、母親のケアも実践している。今後もそれを継続することによって、行事には親族が来校するなど、少しずつ、理解の輪は広がっていく。

### 感想

目の前に海の見える広い敷地に、校舎、プレイルーム、寄宿舍、研究棟等があり、実践と研究が行われているので、特別支援教育指導の在り方の指針ともなり、多様な子どもたちの良さや可能性を見出し、伸ばす、また自立に向けての課題解決を行う学校であり、宮崎県の教員の研修の場としてもよいと思った。参観すると、先生方も一生懸命で、若い先生から中堅、それ以上の先生方もいて、教師間の勉強にもなるようだ。子ども達一人一人に対応し、手を貸すところは貸し、自分でできるところは指示し、見守る体制ができてるようにみえた。副校長先生のお話の中で印象的だったのは、保護者への対応についてであった。保護者もそれぞれに多様化しており、要望も悩みもそれぞれとのことであった。難しい事情を抱えての育児に学校側の真摯な対応が見受けられてよかった。

## 2 横浜市立東山田中学校 コミュニティスクール

平成17年に学校運営協議会を設置し、神奈川県初のコミュニティスクールとして開校。委員の構成は保護者代表2名、地域より7名、学識関係者4名、学校関係3名 月1回の会議で学校の基本方針の承認、課題解決に向けての協議、教育委員会への意見等も出し合う。その際、東山田中学校の教職員も会議に参加しているとのことであった。

学校側のメリットは多様な視点から教職員の見識が広がること、地域や学校以外での様子（現状）がわかること、学校や生徒会が計画していることが実現しやすいこと、学校経営について、校長の方針を地域、保護者がバックアップすることの説明であった。これは大きな力となり、ひいては子どものためにもなる。

東山田中学校は中学校内にコミュニティハウスがあり、地域の活動があるため、地域の人の出入りもあり、自然な形で地域と学校がお互いに関心をもっている雰囲気がある。

学校運営協議会だけでなく、平成21年度から、より効果的で具体的な学校支援のための実働部隊といえる学校支援地域本部が設置される。この両部会があることで、東山田地区の地域の中核として学校が存在している。学校、子ども、保護者、地域が一体となって、子どもたちの教育環境が整っていた。教育環境を整えば、「キャリア教育」の推進も図られる。現に3年間を見通したキャリア教育をしており、単なる職場体験だけでなく、その体験をいかした冊子作りや、3年時には、地域の人が面接官となって、進路に向けての対策も行われていた。

### 感想

中学校の中に公民館があり、地域の方の活動や学校に対しての関心を高め、また学校行事や授業の手助けとして、要請、要望に応じて、学校支援地域本部がボランティアを派遣していた。学校としては、総合学習の題材や指導者を探したりするのは教員だけでは困難だと思う。そんな時に地域の助けはありがたいとのことであり、うまく機能しているとてよい学校、地域だと感心した。会議には教師も参加することで、情報の共有がある。例えば、行事の日程調整、教科書だけでは足りない部分の指導や実践等うまくいかせていると思った。

わが地元を考えると、学校と地域のつながりは密接で、協力的だが、主体的かという、少々疑問で、学校行事だから協力するとか、地域の行事に生徒が参加する体制が、一時的で少し能動的な面も見受けられる。学校の先生は異動があり、同じ人がずっと同じ学校に留まることはないので、このような地域の部会（人）があることによって、先生が変わっても子どもたちは、しっかりと地域と関わり、育っていくと思う。一過性に終わることなく、積み上げていくことが大切で、東山田中学校がコミュニティスクールに12年間取り組んできた成果は大いに参考になった。

### 1. 中村中学校・高等学校

永井校長先生から、率直に学校の抱える課題を話していただき、たいへん学ぶことが多かった。私立学校ならではの経営面などでの難しさもあるようであったが、逆に先生方の異動がない中で数年を見通しながらやることができる点や、独自の教育を考えやすくなる面もあるように感じた。先生の異動がない中で生徒に6年間関わるということで、かなり先生と生徒の距離も近くなり、親身に指導されているように感じた。校長先生自身、約30年勤務されているということで、その中での課題を踏まえて、カリキュラム等、現在校長として地道に改善できることを改善されていると感じた。都市の学校と地方の学校の違いはあったが、それほど地域性が学校に影響を与えているとは感じなかった。

また共学と女子校の違いなどからの課題もあるようであったが、逆に女子校の強みを生かして、伸びている生徒もいるように感じた。

今回の視察のように、様々な特色をもつ学校の話聞くことは、視野が広がり、今後の宮崎県の学校について考える上でも有益であると感じた。

### 2. 筑波大学附属久里浜特別支援学校

筑波大学附属久里浜特別支援学校を視察できたことは、今後の県における特別支援について考える上で、たいへん意義があったと感じる。特に各県から先生方が研修に来られ、その経験をまた自県に持って帰られることで、全国的な特別支援教育の質の向上につながると感じた。

そして特に筑波大学附属久里浜特別支援学校で初めてお聞きした支援方法として、特に幼児部において、家庭訪問を行い、家庭での支援方法を先生から家族に伝えられるということであった。これは私はこれまで聞いたことがない支援方法であったが、障がいのある子の保護者の方は日々子どもへの接し方に苦慮されていることは重々承知していたので、本県においてもぜひ、家庭訪問を行い、学校と家庭の連続した支援を行っていただきたいと思った。

また宮崎県から常にこのような特別支援学校に先生方を派遣していただき、宮崎県の教育の向上に繋げていただきたいと切に感じた。

### 3. 横浜市立東山田中学校

東山田中学校ではコミュニティ・ハウス（スクール）について、お話をお聞きした。学校に公民館が併設されているような印象を持った。先生方にとって、このような場が併設されていることは、先生方の実際の業務のサポートになっているようであった。このような場が併設されていることで、先生方も様々な課題を抱え込まずにすむように感じ、また生徒たちも地域の方の目を感じ、地域の方も学校を理解しやすくなると感じた。宮崎県でもぜひ広げていってほしいと感じた。



### 1 中村中学校・高等学校

学校長がキャリアコンサルタントの資格を有しており、独自のキャリアデザイン授業を実施している。中学1から高校3年までの6学年で完成させるもので、生徒には、30歳の自分を考え、人生の様々な困難に耐える強さやそれを解決できる自主自立型学習者の育成を目標としている。生徒一人一人の個性に応じ、リーダーだけでなくサポーターにもなることのできる生徒を理想とする。学習に関しても、思考力を特化した思考型教育の実践が特長とされており、各科目の授業について、各思考力（論旨的、相互理解的、批判的等）に特化して組み立てられていた。女子生徒のみであり、社会における男女格差等に関する視点はどうかされているのか尋ねたところ、生徒の中には、専業主婦を当然とする考えの生徒もいるが、キャリア教育も含め男女の区別はないことを当然として指導されているとのことであった。

### 2 筑波大学附属久里浜特別支援学校

知的障がいと合わせ有する自閉症の児童を対象とし、幼稚部と小学部が設置されている。児童への指導については、根拠あるものを目指し、指導要領、教材を確認しつつ、各人に合わせた指導を行っていた。特別支援総合研修所が隣接していることもあり、海外からも含め年に80から90団体が研修、見学に訪れている。保護者との連携を特に重視し、幼稚部については親子学習会の実施及び、家庭生活支援（登校を嫌がる児童の自宅を教師が訪問し、登校の準備等を支援する等）を行っており、小学部については年に6回程の学習会（専門家講演）を実施している。母親に負担が集中することが多いため、学校の様子を撮影した写真を保護者に渡して、周囲の親族（祖父母等）への理解を求めたり、父親同士の交流企画（校舎のペイントイベント）を実施していた。海岸沿いに設置され、敷地も広く、とてもよい環境であった。

### 3 横浜市立東山田中学校コミュニティハウス

中学校の開設時からコミュニティハウスを予定していたとのことで、校舎と直接つながった部屋内に、サロン、研修室、事務所などのスペースが十分に確保されていた。学校運営協議会は、地域住民、保護者、学識経験者、学校関係者合わせて15名で構成され、毎月1回開催されている（累積回数126回）。当初は、学校からの学校運営方針に関する形式的な報告が主であったが、形骸化を防ぐべく、現場の抱える課題（部活動、生徒指導等）について、議論するようにし、現在まで中身のある協議会となっているようだった。事務所を同じくして、学校支援地域本部（やまたらう本部）が設置されており、コミュニティカレンダーの作成、キャリア教育学習支援等を行っている。家庭科教員からの依頼で、赤ちゃんふれあい体験（複数の赤ちゃんを保護者に参加してもらい、ふれあい授業を行い、数か月後に再会授業を行う）を実施した報告があった。学校側の負担も軽減し、授業も充実する制度であり、地域と一体となって児童・生徒を育てることが実践されていると感じた。

以上